

キャリア教育の 10年を検証する

PART 1



筑波大学 人間系 教授
藤田晃之

法政大学キャリアデザイン学部教授
児美川孝一郎

ふじた・てるゆき●1963年生まれ。筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。筑波大学教育学系助教授、同大学院博士課程人間総合科学研究科准教授などを経て、2008年文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター総括研究官。同省 初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導調査官(キャリア教育担当)および同局 教育課程課 教科調査官(特別活動担当)を併任。13年4月より現職。近著に『キャリア教育基礎論』(実業之日本社)

こみかわ・こういちろう●1963年生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。法政大学文学部教育学科専任講師、助教授を経て、2003年よりキャリアデザイン学部助教授、教授(現職)、学部長(09～11年)。現在、同大学 教育開発支援機構FD推進センター長。日本教育学会理事、日本キャリアデザイン学会副会長。著書に『権利としてのキャリア教育』(明石書店)、『キャリア教育のウソ』(ちくまプリマー新書)など

対談

この10年をふり返る

何ができて、

何ができなかったのか

キャリア教育元年から10年、この間にできたこと、できなかったことは何か、キャリア教育を牽引してきた藤田晃之先生、児美川孝一郎先生に語りあっていたきました。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山論

—2008年から5年間、文部科学省でキャリア教育担当の調査官などを務め、施策の策定や普及に携わってきた藤田先生と、法政大学キャリアデザイン学部の元学部長で、キャリア教育に関する誤解に警鐘を鳴らしてきた児美川先生。役割は違えどもキャリア教育に対する認識や期待に共通点が多いと思います。キャリア教育の10年を検証するにあたり、まずは同教育が果たしたポジティブな面からお聞かせください。

藤田▼基本的なことですが、キャリア教育という言葉に対する認識が広がったこと。そして、それを推進する学校が増えたことを、まずあげたいと思います。定着するまでに10年ほどかかりましたが、キャリア教育の意義を

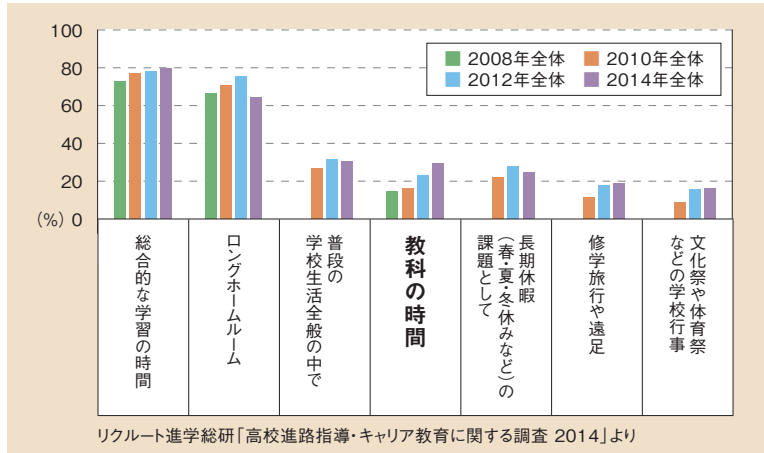
児美川▼広まったというのは僕も同感です。付け加えるなら、「開かれた学校」化が進んでいるように感じています。学校に外部の人間を入れることや、生徒を外に出すことへの抵抗感が薄れてきました。それは学校教育全体として喜ばしいことです。

藤田▼若い人が社会人と触れ、将来を展望することで、今が、閉じた今ではなく、将来に開かれた今になってきます。各種調査でも、かつてのような自信を喪失した若者とは違う像が見え始めています。

児美川▼僕は、生徒はもちろんですが、先生方の意識も変わったと思っています

図表1 「貴校では、キャリア教育をどの時間で実施していますか？」

上記質問に対して、キャリア教育実施校が選択した上位項目の経年変化。(詳しくはP14)



リクルート進学総研「高校進路指導・キャリア教育に関する調査 2014」より

す。教科を教えていても、「数学の時間なのだから数学を教える」ではなく、生徒がいずれ社会に出ていくことを踏まえたくえて「これって将来にどうつながるの」という意識をもって指導する先生が増えたのではないのでしょうか。自分が教えていることの社会的な意味を考えざるを得なくなってきたといってもいいでしょう。

藤田▼それは、キャリア教育を実施する時間として「教科の時間」が年々増

びているという調査結果(図表1)にも反映されていますね。これは先生方にとつて納得しやすいのではないのでしょうか。というのも、児美川先生が指摘しているように、今までは受験圧力を利用して脅すように勉強させてきた面がないとはいえません。その手法が行き詰っていることはみんなが実感しているわけで、授業へのモチベーションをあげるためにもキャリア教育は効果を発揮すると考えています。

児美川▼「教科におけるキャリア教育の推進」や「キャリア教育と学習意欲の向上」については、藤田先生がいらした国立教育政策研究所でも繰り返し強調されてきましたからね。

藤田▼今の学習指導要領で、キャリア教育に何を期待しているかといえば学習意欲の向上です。やらされ感いっぱい、自ら学ばない子がたくさんいるなかで、将来とのつながりを提示することはそもそもわかりやすい動機づけの方法です。実際、キャリア教育に力を入れている学校は、受験指導的な側面から見ても進学実績はあがっているんです。

——ただ、児美川先生は大学にいらして「本当に生徒の主体性が育ったの

か？」という疑問を呈しています。

児美川▼将来を見据えた教育という意識がせつかく広まりつつあるのに、大学受験というフィルターによって中断してしまうところがあります。もちろん、積極的に外に飛び出し、NPOなどと連携したり、起業したりするような学生はいます。いっぽうで依存的な学生が増えているのも事実。二極化というか、特に進学校出身の学生がポカンと浮いているような気がしてなりません。

藤田▼問題はそこです。キャリア教育普及当初、「勤労観・職業観を育てる教育」という側面が強調されたものですから、普通科それも進学校の先生方に、自分たちは関係ないと思いつまされてしまったことが残念です。

児美川▼進学校の生徒こそ、きちんと受けてもらいたいですけれどね。

それはニート・フリーター 対策から始まった

——今、お話しされたように、お二人とも、キャリア教育が、「勤労観・職業観を育てる教育」として始まったところにボタンのかけ違いが生じたと指摘しています。

藤田▼90年代の末のニート・フリーター問題は深刻であり、若年者雇用対策として勤労観・職業観を育てる教育は必要でした。ただそれは本来のキャリア教育の側面ではありませ

方」を考えて指導してきた先生方の一部に違和感や拒否感をもたれてしまいました。「なんだ、結局キャリア教育って勤労観・職業観に矮小化していくのか」と。こうした文脈では、教科は もちろん、部活動や学校行事を通して全校的な指導という発想はもちにくかったと思います。

児美川▼確かに、キャリア教育で狙いとす力をどの分野でつけるかというとき、最初の頃は「学び」を通じて、という部分が抜け落ちていました。学校での学びに主体的に取り組むことも立派なキャリア発達の課題です。本来は「ワーク」があり「ライフ」があり、その基盤として「学び」があります。キャリア教育はそのすべてにかかわるはずなのに、「ワークキャリア」にばかり焦点があたり、「ライフキャリア」の手当ても薄ければ、学びを通してという感覚も薄かったのではないのでしょうか。

藤田▼そのとおりで、ようやくそうした誤解が解けつつあることは大きいと



Koichiro Komikawa

きの推進母体になりました。

児美川▼そうしたことも、冒頭の開かれた学校につながっていますね。

「偏差値輪切りは正策としての『自分探し』という誤解」

— インターンシップに加え、お二人は、キャリア教育にはいくつかの解くべき誤解があると指摘しています。例えばどういう点でしょうか？

児美川▼キャリア教育においては、自己理解などの「自分軸」の一方、今の社会はどういう構造で成り立ち、どういう課題を抱え、どう変化していくのかという「社会軸」の理解も大切です。けれど、この10年間は、やりたいことや夢といった自分軸に振れ過ぎたように思います。

藤田▼その典型が「自分探し」という言葉ですね。自分を探しても、内部空間には何も無いわけで、外部との関係の中でしか存在しない。

児美川▼そのとおりです。自分を持ちながら社会も理解する。社会性をもちながら自分を見つめるという往復が重要なのに、「やりたいこと」で引っ張るキャリア教育が多すぎました。

藤田▼「勤労観・職業観を育てる教育」がニート・フリーター問題に端を

発したように、「やりたいことや夢」についても偏差値輪切りという難題が先行していました。その是正策として掲げてきたのだけれど、あまりに長くその論法を使いすぎました。打ちだした側の責任ですが、どうしても「自己実現」「夢や希望」とメッセージだけが強調されてしまった。そうした情緒に訴える言葉って学校教育に親和性があるんですよ。

児美川▼それは教育学の分野も同じで、教育全体の課題ですね。ただ、現実には、大学生はその影響をもろに受けていて、仕事で自己実現しなければなどと思込んでいます。適職信仰というのでしょうか、自分に相応しい職がどこにあると信じ、就職活動が進まない。進路は、やりたいこと、やれること、やるべきことのパランスのなかで決めていくものなのに。

もともと、偏差値輪切りは是正という経緯は理解できますから、これに社会性という厚みを加えればいい方向に進むと思っています。

「正社員モデルの崩壊 将来のリスクを提示すべき」

— その際、児美川先生は、今後の人生で生じるだろう「リスク」について

思っています。

児美川▼中学校・小学校に続き、少し遅れて高校にキャリア教育が入ってきたとき、中学校同様、キャリア教育が就業体験という認識があったと思います。それが途中から「教科の中で」と言われ始め、普通科の先生方はやりやすくなっただけです。普通科でインターンシップというと敷居が高いけれど、教科を通じてならできると。

藤田▼そうした教科の中での取り組みを進めていき、学びと将来とがリンクしていくことで、「では、今の学びの先にある大学は何をしているのだから？」「研究所の人たちは？」「製品開発の現場は？」と視野が広がり、そ

れがインターンシップの形に戻って、理想的だと思えます。

児美川▼何も事業所にこだわる必要はありませんね。もっと言えば、学校行事の委員会活動などをインターンシップに近い形にすることも可能です。修学旅行の計画を旅行業者と協働で行うことも、その他のPBL型の授業にしても、すべてインターンシップの代わりになるはずですよ。

藤田▼まだまだ課題は多いインターンシップ・職場体験活動ですが副産物も生まれました。それは、各地に職場体験推進協議会のような連携組織が半ば強制的に作られたこと。実はこれが、それ以降のキャリア教育をする

図表2 「自分の将来の生き方や進路について考えるため、ホームルーム活動の時間などで、これまでにどのようなことを指導してほしかったですか？」
上記質問に対し、高校生が選択した割合が高かった上位10項目を抜粋。

選択項目	割合
1 自分の個性や適性(向き・不向き)を考える学習	29.9%
2 社会人・職業人としての常識やマナー	26.5%
3 就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応	23.1%
4 卒業後の進路(進学や就職)選択の考え方や方法	19.7%
5 上級学校(大学、短期大学、専門学校等)の教育内容や特色	18.2%
6 近年の若者の雇用・就職・就業の動向	17.1%
7 学ぶことや働くことの意義や目的	16.7%
8 産業や職業の種類や内容	15.7%
9 転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組み	15.0%
10 将来の職業選択や役割などの生き方や人生設計	14.7%

国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」より

の教育を手厚くするべきだと主張されています。

児美川▼正社員モデルが崩壊した今、現実には多くの卒業生は非正規で雇用されることになります。そうした前提に立つとき、例えば労働者の権利や労働法などについての情報提供は、理不尽な処遇にも対応していくための武器となるはずです。

藤田▼景気の影響を受け、法令に違

反するような人員調整をする企業は少なくありません。守る術や相談すべき相手を提示してあげないと、いざというとき泣き寝入りするしかなくなると思います。すべてを教員が請負うのは難しいため、労働基準監督署やハローワークなども連携し、リアルな情報を伝えてほしいと思います。

児美川▼今は学校も非正規雇用の多い職場です。すぐ目の前にある現実なんですよね。ショートホームルームで担任が「こんなことあるよね」と話すだけでもいい。そういうことの積み重ねが効いてくると思います。

藤田▼国立教育政策研究所の調査(図表2)でも、多くの生徒が将来のリスクに対する備えを在学中に欲していることがわかっています。先生方が考えている以上に、彼らは未来に不安を抱えています。その不安に寄り添わないといけません。

——ここ10年でキャリア教育は大きく変化しましたが、今後はどのような発展していくでしょうか？

児美川▼確かに、キャリア教育のイメージは変わりました。2011年の中教審答申でも、「二人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる

これからがセカンドステージ

能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し直しています。

藤田▼「勤労観・職業観」だけではない、人間のキャリア発達全体を支援するという、キャリア教育の全体像が見えてきました。「だったら受け入れられる」というところまで先生方が歩み寄ってきただけというものが今の状況という気がします。

児美川▼試行錯誤がありました、きちんと点検し、次のステージでよりよい道に進もうという段階でしょうか。言うなればこれからがセカンドス

テージですね。キャリア教育に期待している先生方が増えてきていることが心強いです。

藤田▼何より、学習意欲にしろ生活態度にしろ、生徒の変化が実感されつつあります。キャリア教育に腰が引けていた先生も、「この子たち変わってきたね」という実感をもつことで意識を転換したケースは少なくありません。学校の変化によって生徒が変わると同様、生徒の変容によって学校が変わるという相乗効果が期待できる時期に來たと感じています。(P38のメッセージもあわせてご覧ください)

Teruyuki Fujita

